青森県五所川原市方言の形容詞のアクセント

寺本碧季

1. 概要

本研究では、津軽方言の 1 つである青森県五所川原市方言の形容詞のアクセントについて、終止形・過去形・仮定形・否定形の 4 つを調査しまとめた。

調査の結果、五所川原方言の形容詞のアクセントは規則に基づき 2 種類に分かれた。それぞれを指し示す用語として上野（2017）の用語を踏襲し、一方を「有核型」、もう一方を「無核型」と呼ぶ。

2. 先行研究と調査方法

同じく津軽方言に属する方言に関しては、弘前市方言の名詞（松森 2012: 26-29）、青森市方言の形容詞（上野 1991: 45-81）に関する先行研究がある。また五所川原市方言については名詞（上野 2017: 71-91、Igarashi 2006: 141-146）に関する先行研究があるものの、形容詞に関する充分な記述はない。本研究の目的は、五所川原方言の形容詞のアクセントについて体系的に調べることである。

本研究でいうアクセントとは単語固有のピッチパターンのことである。筆者がそれぞれの話者に用意した調査語を当該方言話者 2 名に発音通り書き出してもらい、読み上げられた音声を録音したのち音声分析ソフト Praat でピッチ曲線を観察した。普段使用しないという調査語は話者が話す単語に変え、文章も相談しながら適宜変えた。なお 2 名とも五所川原市板柳町出身であるが、1 人は成人後北海道で約 40 年過ごしたのち現在は青森市浪岡に居住している。出身地と現住地ともに五所川原市である方を話者 1、居住地が変化した方を話者 2 とする。話者 1 の発話で見られた終助詞の「な」は、これ自体で独立したアクセント単位（語に相当）となる。

3. 五所川原市方言の形容詞のアクセント規則

有核型と無核型のピッチパターンを記号で示す。「｛｝」はアクセント単位を、「［」はピッチの上昇を、「］」はピッチの下降を、「θ（シータ）」は音節を、「μ（ミュー）」はモーラを表す。なおアクセント単位は論文最後に示した付録では「{}」で示したが、本文中ではスペースで示している。

（1）青森県五所川原市方言の形容詞のアクセント規則

A.有核型形容詞

a-1｛…［θ］｝｛…｝

次に別のアクセント単位が続く場合の分類である。

有核型形容詞語根の最終音節でピッチは上昇し、次のアクセント単位間でピッチ

が下降する。

a-2 { … [μ] μ }

次に別のアクセント単位がなく、自身が 2 モーラ以上のアクセント単位の場合の分類である。

有核型形容詞語根の最終音節の最初のモーラでピッチが上昇し、最終モーラとの間でピッチが下降する。

a-3 { … }] { μ }

次に別のアクセント単位がなく、自身が 1 モーラのアクセント単位の場合である。

自身のアクセント単位の直前でピッチが下降する。

B.無核型形容詞

b-1 { … [θ }

次に続く別のアクセント単位の有無問わず、自身のアクセント単位の最終音節のみピッチが高くなる。

4. 各活用形の具体例

4.1. 終止形

終止形のデータを示す。アクセント単位が 2 単位のものを除いたデータは、話者 1 から 43 単語、話者 2 からは 81 単語の計 124 単語得た。(1) の規則にほぼ当てはまる結果となった。

(2) 規則的な終止形の例

a-1　有核型形容詞語根をもち、別のアクセント単位が続くもの（話者 1）

[いい]　な（良いな)、く[れえ]　な（黒いな)、しゃっ[こい]　な（冷たいな）

a-2　有核型形容詞語根をもち、アクセント単位が続かないもの（話者 2）

[い]い（良い)、ぬ[げ]え（ぬくい)、しめっ[ぽ]い（湿っぽい）

b-1　無核型形容詞語根を持つもの

（話者 1）あ[づな（厚いな)、く[れな（暗いな)、むずか[しい　な（難しいな）

（話者 2）う[すい（薄い)、くだら[ねえ（下らない)、め[な（美味しいな）

a-1 は終助詞「な」が付いたことでアクセント単位が 2 単位となり、その間でピッチが下降している一方、a-2 は自身のアクセント単位で終わるため最終モーラと次末モーラ間でピッチが下降する。b-1 はアクセント単位の最終音節部分のみピッチが高いことが分かる。なお「め[な」は「め（美味しい）+終助詞「な」」であり、1 モーラの無核型に同じく無核型が

付くとアクセント単位が 1 単位になると考えられる。

次はピッチパターンが例外的な単語であり、語末にかけてピッチが徐々に下がっていった。全活用形で例外的だったため、元は別の品詞であった可能性もある。

（3）（1）の規則に当てはまらなかった終止形

（話者 1）[ま]ね]　な（駄目だな）、（話者 2）ま]ね（駄目だ）

終止形では 2 単位から成るものも調査した。アクセント単位は必ずしも形態素（意味の最小単位）とは一致しない。例外（7）を除き前半部は最終音節で、後半部は終助詞を除いた最終音節でピッチが高くなった。以下にそれぞれ示す。

（4）前半部と後半部がともに無核型の形容詞

（話者 1）は[ば]　ふれ[ば]　な（幅広いな）、け]　あ[づ　な（毛深い（毛厚い）な）

「幅」「毛」は共に単独だと無核型である。このことから、形容詞と結びつき複合語となると前半部は有核型の振舞を見せると考える。その他強意の「ば」が付いたことも要因となった可能性がある（はばふれな→はばふればな）。

（5）前半部と後半部がともに有核型の形容詞

（話者 1）ここ[ろ]　ね]　な（心無いな）、け]　あ[づ　な（毛深い（毛厚い）な）

（話者 2）ここ[ろ]　ね]え（心無い）

（6）前半部が無核型、後半部が有核型の形容詞

（話者 1）えん[りょ　ね]な（遠慮ないな）、あじ[け　[ね]　な（味気ないな）

（話者 2）えん[りょ　ね]え

話者 2 への聞き取り調査から、これに分類されたものは後半部の有核型のアクセントを任意で上げることが出来る可能性があると考える。

（7）例外的な 2 単位以上のもの

（話者 1）[きみ]　わるい]　な

（話者 2）[きみ]　わ]　る]　い

最後に無核型と有核型のどちらにもなる単語の例を示す。（1）の規則に従うと前者は b-1、後者は a-2 である。

（8）どちらの型にもなる語の例

ぐちっ[ぽい・ぐちっ[ぽ]い（愚痴っぽい）、しづ[らい・しづ[ら]い（し辛い）

4.2. 過去形

過去形の語末は「へあった」「してあった」「がった」の 3 種類があった。(1) の規則に則ると全てアクセント単位が 2 単位となった。「へあった」と「してあった」は無核型と有核型で同じアクセント単位の分かれ方をしたのに対し、「がった」のみ無核型は形容詞語根と「がった」でアクセント単位が分かれ (11) b-1、有核型 (11) a-1 は分かれずまとまった。

(9)「へあった」形の例

a-1　あ[つへ]　あった]　な（熱かったな)、うる[せへ]　あった]　な

b-1　あづ[へ　あった]　な（厚かったな）※下線部が b-1 部分

(10)「してあった」形の例

a-1　く[れして]　あった]　な（黒かったな）

b-1　くれし[て　あった]　な（暗かったな）※下線部が b-1 部分

(11)「がった」形の例

a-1　あ[おがった]　な（話者 1・話者 2：青かったな）

a-2　い[で]　がっ]た　※下線部が a-2（話者 2）

a-3　うす[がっ]　た（話者 2：薄かった）※下線部が a-3

　　くだらね[がっ]　た（話者 2：下らなかった）※下線部が a-3

b-1　あさ[がっ　た]　な　※下線部が b-1（話者 1・話者 2：浅かった）

(1) a-3 の分類は過去形の「がった」形でのみみられた。この場合「がった」の「た」は 1 つのアクセント単位を形成する有核型のもので、かつ 1 モーラである。

形容詞語根が有核型だと「がった」まででアクセント単位がまとまり無核型だと分かれるのは、歴史的変化が関係している。かつて「青かった」は「*あ[おぐ]　あっ]た」と 2 単位のアクセント単位であったと考えられる。この「～ぐあった」が融合したのが有核型、現在も維持しているのが無核型であると推測される。ただし (11) a-2 の通り「痛い」という有核型形容詞語根と「がった」が分かれているのは、これを発話した話者 2 に別地域のアクセントが影響した可能性が高いためである。

最後に、終止形では高いピッチを担えていても「がった」形に接続した際形容詞語根が 1 モーラだと、有核型でも無核型のように「がった」部分のピッチが高くなり、形容詞の最終音節でピッチが高くなるという有核型の特徴が当てはまらなくなる。

4.3. 仮定形

仮定形は語根に「ば」がつく。(1) の規則に当てはめると次のようになる。「, 」は隣り合うアクセント単位が互いのアクセントに影響を及ぼさないことを示す。

（12）「ば」形

a-1　あ[おいば]，いい]　な（話者 1：青いならいいな）

　　す[げえば]，ほ[め]　る（話者 2：すごいなら褒める）

a-2　ほ[める]　よ，す[げえ]ば（話者 2：褒めるよ、すごいなら）

b-1　かなしい[ば]，ながな[が（話者 1：悲しいなら泣きな）

最初に話者 1 に対して次にアクセント単位が続く仮定形の文章の調査を行い、その後話者 2 に倒置文を聞いた。その結果形容詞語根が無核型の場合は語順問わず同じピッチパターンだったのに対し、有核型だと後ろに続く場合は「ば」までピッチが高く、言い切る場合は「ば」の直前で下がった。

4.4. 否定形

否定形は語根に「ぐねえ」がつく。過去形同様アクセント単位が 2 単位である。(1) の規則通りとなった例を挙げると次のようになる。

（13）「ぐねえ」形

a-1　[けぐ]　ね]え　※下線部が a-1（話者 1：痒くない）

b-1　あげ[ぐ　ね]え※下線部が b-1（話者 1：赤くない）

例外としては「[ま]　ね]　ぐ]　ね]え（駄目でない）」の他に、「かな[し［ぐ]　ねえ」などがあった。これは終止形（無核型）のピッチの上昇位置を維持していたため無核型の特徴である「アクセント単位の最終音節のみピッチが高い」に当てはまらなくなり、有核型と同じふるまいとなった。

5. まとめと課題

津軽方言はピッチの上昇位置が重要だとされる一方（上野 1991）、無核型にも上昇がある（同書同頁）。また、有核型にも下降が見られる（Igarashi 2006）。そのため本研究ではピッチの上昇のみならず下降にも注目した。その他音節、モーラ、アクセント単位という概念を使った。その結果（1）のような全活用形に通じる規則を導いた。過去形「がった」は歴史的経緯や話者の違いにより、有核型と無核型で大きな違いが見られた。改善の余地として、話者の統一、連体形の調査が挙げられる。

参考文献

上野善道（1991）「青森市方言の形容詞のアクセント」『アジア・アフリカ文法研究』19: 45-81

上野善道（2017）「青森県津軽方言のアクセント資料」『ことばとくらし』29: 71-91
松森晶子・木部暢子・中井幸比古・新田哲夫（2012）『日本語アクセント入門』、東京：三省堂
Igarashi,Yosuke（2006）A preliminary analysis of the relation between lexical pitch Accent and prosodic phrasing in Goshogawara Japanese.Paper presented in the 20th conference of the phonetic society of Japan.